

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第3章「制御不能」

3月12日夕方、陸上自衛隊第6特科連隊(郡山市)の佐藤勇一陸士長(22)は消防車のハンドルを握り、再び福島第一原発2、3号機西側の坂を下っていた。左手には、ほんの1時間半ほど前に爆発した1号機原子炉建屋が見えていた。上部は骨組みだけになっている。

また爆発するんじゃないか…。

3号機の海側にある「逆洗弁ピット」という大きな立坑にたまった海水を、消防車3台の連結で1号機原子炉に連続注入しなければならぬ。

1号機の爆発で消防車の助手席側の窓はなくなっていた。吹き飛んだ

再び注水現場へ

⑥

「命の保証するのかわ」

がれきを乗り越えるたび、消防車が傾いた。

福島駐屯地の消防車が逆洗弁ピットから海水をくみ上げ、郡山駐屯地の消防車で中継、東京電力の消防車が1号機に注水する。連結するホ

スは300近くになる。

東電の消防車を誰が操作するかをめぐっては、免震重要棟内で激しいやりとりがあった。

1号機爆発で負傷した東電自衛消防隊の隊長小川広幸(50)に代わり、



爆発で上部が骨組みだけとなった1号機原子炉建屋=2011年3月12日(東京電力提供)

指揮を執るこ

とになった副

隊長新井知行

(42)が、子会

社の南明興産

(当時)の責

任者に人を出

すよう求めた

時のことだ。

「本当に行

けて言うのか。命の保証はするのかわ!」。すごいけんまくだった。だが、東電社員は消防車の操作方法を知らない。これまでは南明が操作を担っていた。

「保証はできません。でも行かないと、もっと悪い状況になるんですよ。私も行きますから」。新井は頭を下げた。

その新井と消防隊のメンバーと南明の社員1人が東電の消防車の操作に向かった。全員、全面マスクに防護服姿だった。日が沈みかけていた。

爆発で飛んできたがれきで、設置済みのホースが破損していた。新井ががれきをどけようとすると、放射線管理をする保安班員がマスク越しに叫んだ。

「触るなっ!」

高線量のがれきだった。1号機原子炉への送水口があるタービン建屋

に近づくと、持っていた線量計の警報が鳴った。もはや建屋周辺に安全な場所などなかった。

新井たちは破損したホースを予備のホースに交換した。逆洗弁ピットと中継地点では佐藤ら陸自隊員が送水の準備を整え、3台連結が完了した。

「氏、入れます」

佐藤がマスクの中で声に出し、消防車の水圧調整レバーを操作すると、しぼんでいたホースがみるみる膨らんだ。

12日午後7時4分、1号機原子炉への海水注入がようやく始まった。

この海水注入をめぐり、免震棟と首相官邸の間で思わぬトラブルが起きていたことを、佐藤はもちろん、新井も知らなかった。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 前田有貴子)